

日建連建築セミナー開催報告「風景の建築」

建築本部では、日建連建築宣言に示された基本方針の一つである「世界に誇れる未来の建築文化の創造」に向けた活動の一環として、毎年、日建連建築セミナーを開催している。同セミナーでは、活躍中の建築家を講師に招き、建築を学ぶ学生、設計事務所や建設会社で設計業務に携わる若手を対象とした講演及び対談を行っている。今年度は、道の駅ましろ（竣工二〇一六年、第五九回BCS賞受賞）、知立の寺子屋（竣工二〇一六年、日建連表彰二〇二二 第六二回BCS賞受賞）を設計したMOUNTFUJI ARCHITECTS STUDIOの原田真宏氏を招き、「風景の建築」と題して十二月二十二日に東京証券会館にて開催した。

単純な原理、複雑な現実 調和した建築

原田氏は、建築における最も重要なプロセスとして、設計を始める前段階の「複雑な現実」から「単純な原理」を見出すプロセスの重要性を挙げた。この現実（具体）から原理（抽象）へと考えを昇華させる際には、既存の建築理論や設計手法を転用するのではなく、根気強く現実に向き合う必要があると説いた。地域の方や現場の職人から得た知識が、次の設計のヒントに繋がることも珍しくないとのこと、様々な人的ネットワークの蓄積も設計の一



道の駅ましろ（栃木県益子市）について説明する原田真宏氏

助になっていると振り返った。そして設計とは、抽象から具体へと再び立ち返る作業であり、この抽象と具体の往復を経て実現した建築には、多様な現象が生まれ調和した現実になるという。周辺の山々と呼応した形式の道の駅ましろは、その場所

にある文化や自然の潜在的な魅力を見出し、分かりやすく引きだした明快なコンセプトを形成して設計することで、建築は風景へと溶け込み、地域に新たな調和をもたらしているのではないかと述べた。

自然の普遍性、永続性、野性

先に、自然の普遍性や永続性に近接することや、これらを感じることが少なくない。それが楽しみで設計を続けていると伝えた。

セミナー後半の対談

賀持剛一建築設計委員長から「木の魅力」について問われた原田氏は、無機質の鉄やコンクリートと違って、木は構造部材として唯一の有機物である点を挙げた。材料の状態を完全にはコントロールできないことが設計プロセスにおいても、また立ち上る空間としても魅力に繋がっていると続けた。この魅力を生かして、今後も複雑な現実を模索することでは得られない空間の質を追求していき



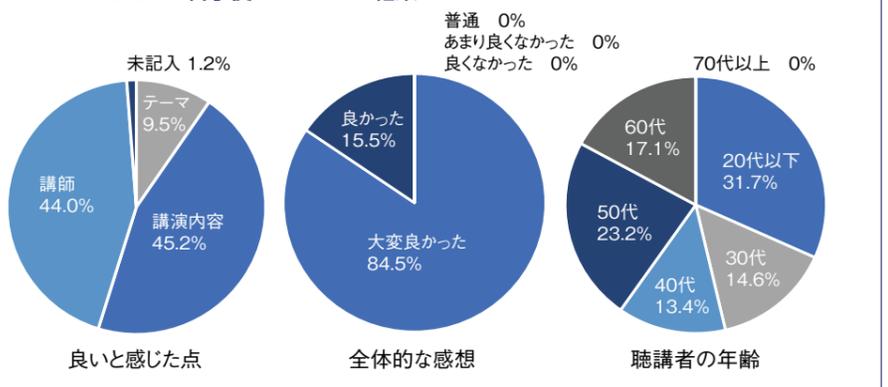
知立の寺子屋（愛知県知立市）

知立の寺子屋では、地域の子も達にも世界に旅立ってもらいたいというクライアントの要望や地域の歴史的な建築様式を踏襲して設計を進めた結果、等分布荷重の懸垂曲線による屋根構造が採用されている。原田氏は、山歩きで目にした水滴で蜘蛛の糸が絡みつつ長スパンが実現している仕組みから、自然の中に建築の原理が潜んでいることに気付いたという。設計は突き詰めた

追求していきたいと述べ、セミナーを締めくくった。講演の様子は、日建連公式YouTubeチャンネルにて公開する。

日建連公式 YouTube チャンネルはこちら

セミナー終了後のアンケート結果



アンケートコメント（抜粋）
 ・原田さんの建築へのアプローチを聞いて大変感銘を受けた。
 ・事前に書いた質問まで取り扱っていただき、ありがとうございました。アドバイスも頂戴でき、とても嬉しかったです。
 ・対談進行（新建築社四方裕氏）が講師の良さを引き出していました。賀持さんとのやりとりも素晴らしいかったです。